■文化史の窓⑮

「啓示と理性の調和」は可能か

松本　弘

読者がこのタイトルを聞いて真っ先に思い浮かべるのは、中世ヨーロッパ最大の哲学者トマス・アクイナス（1225－74）であろう。しかし、イスラーム世界では、それは正統派神学アシュアリー派の名祖アシュアリー（873－935）と、近代エジプトにおいてイスラーム改革運動を展開したムハンマド・アブドゥフ（1849－1905）となる。

キリスト教とイスラームは、ユダヤ教とともに同じ唯一神を信仰するいわば兄弟宗教であるが、これらは成立当初から、ひとつの大きな矛盾を抱えていた。それは、人間理性をはるかに超越する唯一絶対神を、人間理性、すなわちギリシャ哲学によって説明しなければならないという矛盾である。「神が言うことは正義である」とする一神教と、「正義を行うものが神である」とするギリシャ哲学は本来水と油であり、形而上学的真理のための哲学的論法を信仰の真理のために用いることは、必ず論理の帰結と信仰の教えとの間に軋轢を生じさせる。神学者、哲学者たちは、あらゆる問題の核心で常にこの矛盾と直面することとなる。

中世イスラーム神学では、ギリシャ哲学を用いて人間の責任を主張するムータジラ派と、「なぜと問うことなく」盲目的に信仰せよとするハンバル派（現サウジアラビア・ワッハーブ派の源流）との対立を、アシュアリーが両者の「中間を行く」ことにより解決し、現在まで続く正統派神学を確立した。トマス・アクイナスも、当時のキリスト教神学におけるアリストテレス哲学に関する排斥と受容の対立を、イスラーム哲学を援用することによる収拾し、中世スコラ哲学を完成させた。そして近代エジプトのムハンマド・アブドゥフは、ウェスタン・インパクトとして押し寄せる西欧近代文明に対し、それに迎合する近代派勢力と、ただひたすら拒否するだけの保守派勢力とが対立する状況にあって、過去の純粋なイスラームに回帰することにより、思考の柔軟性を回復して現状を改革しようと試みた。

これら三者に共通することは、その思想内容の中心が「啓示と理性の調和」にあると評価されていることである。三者とも、理性を判断基準として重視する立場と、神の絶対性に依拠して理性を軽視する立場との対立に際し、両者の折衷により問題の解決を図り、その結果大多数の支持を得る総合的な理論の構築に成功している。しかし、それは結局、既述の根本的な矛盾をそのままにして哲学を宗教によって抑制するものであり、理性の活用は宗教の前に立ち止まらなければならないものであった。

宗教に人間や社会の価値の源泉を求める限り、解決方法はこれしか無かろう。しかし、ルネッサンス以降のヨーロッパは、理性を宗教から切り離すことによって、「下位の理性が、上位の神を

語る」という矛盾を解消した。いわゆる西欧近代は、その価値の源泉を宗教ではなく理性に求めるものであり、ムハンマド・アブドゥフが批判した近代派勢力も、理性によって宗教を語る者たちではなく、理性のみによって行動する者たちであった。近代の問題に中世の方法は通用せず、彼の後継者たちは、社会変化に対応する宗教の展開を目指すイスラーム近代主義（のちに世俗主義と一体化）と、宗教によって現実を正そうとするイスラーム原理主義に再分裂していった。

ならば現代には、「啓示と理性の調和」にいかなる意味があるのだろうか。これまでの思想史的プロセスを考えれば、イスラーム原理主義と世俗主義との闘争は、どちらか一方の勝利に終わるという見方のみならず、将来再び「啓示と理性の調和」を唱える思想が現れ、両者の折衷・綜合を図る可能性も存在する。しかし、その場合の「調和」は中世のものとは、当然異なることになる。近現代において宗教が対峙しているのは、宗教に関わる理性の活用ではなく、理性そのものであるからだ。その違いを最も端的に表わしているのが、現代思想による理性批判であろう。

現代思想は、理性を批判するために宗教を持ち出したりはしない。ただ理性のみを問題として批判する。その批判は、レヴィ・ストロースのように人間の判断基準を当人には意識されない「構造」に求めたり、フーコーのように思想ではなく世の中の「仕組み」を問題にしたりと様々だが、そこには一神教が持っていた矛盾よりも、はるかに大きな矛盾が内在している。それは、理性を批判するために、その同じ理性を用いなければならないという矛盾である。批判のための説明も根拠も、当然ながら論理的に示されねばならず、それは批判対象である近代合理主義の枠内でなされる。理性に関わる最大の問題は、理性とはいかなるものか、どうあるべきかということではなく、宗教と同じく他に代替物が無いということではないか。そもそも理性とは、より合理的なものを目指して様々な思想が論争を繰り返すけれど、いつの日か最終的に勝利を収めた思想が全世界を支配することを、その目的とするものかもしれない。資本主義の基本的矛盾（競争の果てに独占がある）と、パラレルな展開を持つものとも言える。ならば、理性は宗教と同じく、対等なる他者を認めない独善性をその基礎に置くものということになる。現代思想は、理性のこのような絶対性に挑んではいるが、得物が同じでは勝負にならない。

近代において革新であった理性は、現代では改革または打倒されるべき伝統となってしまった観がある。結局それは、理性が理想社会を作ろうとするものから、ただ目の前の個別的問題を解決するためのものに移ってきたことを意味する。社会学的法学などは、その典型であろう。この「古い理性」に対し、宗教が巻き返しを図り、現代思想が「新しい理性」を模索している。保守的な宗教が体制変革の旗手となり、革新であるはずの共産主義が保守派と呼ばれるような、保守と革新の混乱が世界中で起きているのも、そのひとつの現れであろう。「新しい理性」とは、一体いかなるものなのか。新たな「啓示と理性の調和」は、将来実現するのか。するとすれば、宗教と綜合されるのは「古い理性」なのか、「新しい理性」なのか。誰かこういうテーマで、おもしろいＳＦ小説を書いてくれないだろうか。

（まつもと　ひろし・本学兼任講師・中東地域研究）